

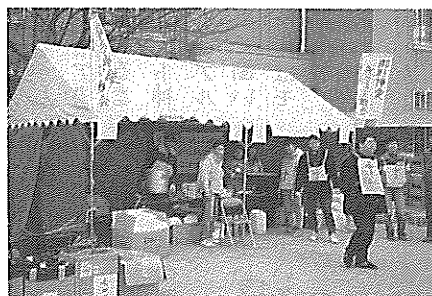
CBCニュース



一月十七日早朝に発生した地震は、兵庫県南部に多大な被害をあたえ歴史的な惨事となったが、中央聖書学校では緊急の運営委員会が開かれ、被災地救援のための神学生派遣が検討された。学期末の追い込みと卒業予定者の理事面接が重なるむずかしい時期であったが、被災地の声と教授・学生の熱意が一致し、派遣が決断された。

関西大震災！ — 神学生、緊急派遣 —

第一次派遣は一月二十一日から二十八日まで九名の学生が、被災地の教会に泊まり込み救援にあたった。神学生たちはまだ地震直後の生々しい被害にショックと戸惑いを覚えながらも、瓦礫の撤去や、教会の食事作り、救援物資の配布などに励んだ。



第二次派遣は二月八日から十九日まで、教師二名・学生十六名が参加。二台のワゴンに物資と人を積めるだけ積み、寿司詰め状態で駒込を深夜に出発した。鳴尾、西灘、御影の各教会に分かれて奉仕にあたったが、女子はおもに食事作りと信徒宅の訪問を担当。男子は会堂の修復、家財の運び出し、屋根の瓦降ろし、水の運搬などの肉体労働が中心であった。十四日と十六日は被害のとくにひどかった長田区で炊き出し。十四日はテント生活の避難所でカレー・リンソットを百八十食分、十六日は小学校の校庭で六百五十食分の肉うどんを配給した。

第三次派遣は三月十七日から二十七日まで教師一名・学生七名により伝道中心の奉仕が行われた。神学生にとって今回の救援派遣は、日頃の礼拝と伝道中心の訓練では学べない多くのことを教えられる機会となった。この世に遣わされた教会としての社会的視野が広がるきっかけになっただけでなく、行いを通してキリストの愛を伝える難しさとも必要性を痛感させられた機会でもあった。また、関西以外の出身学生にとって、関西教区の先生方、信徒の方々とお交わりできたことは感謝なことであった。

神戸の復興は少しずつ進行しているが、教師・学生一同、心を合わせてこれからも祈り続けていきたい。

(T.N.)

CBCネットワーク

祈りのネットワーク

一九七三年、極東高等神学校 (FEAT) の主催で、アッセンブリー教団指導者がマニラに集まって、これからの神学教育について話し合ったことがあった。当時わずか一三の聖書学校しかなかったアジア・太平洋神学大学院 (APU) の前進である極東高等神学校がB・T.Hを出している唯一の学校であった。ところが一九九〇年の現在、インド以西を除くアジア・太平洋同地区には一四〇の聖書学校、大学、大学院があり、約一五、〇〇〇人の学生が在籍するところまでに発展した。

が爆発して教会に集おうとする人々の手足がもぎ取られるような環境の中で聖書学校を経営しているカンボジア、イスラム教徒にトラクトを手渡すことすら法律で禁じられている国情にあつて、国際舞台で活躍する有能な指導者を送りだし、設備と教授においては、アジアで最も整った学校の一つと評価されているマレーシア、生まれたばかりの教会の信徒急増に対処しきれず、牧師、伝道師の養成に苦渋しているモンゴル、それとは対照的に一三〇〇名の学生を擁し、文部省に認可された純神大の外、もう二つの大きな神学校を持つ韓国などの国々から参加した。これらの参会者達がこの会議中、異口同音に誓ったことは、聖書学校間の「祈りのネットワーク」を直ちに実行に移すと言うことであった。これはABOの聖書学校部門コーディネーターのベンジャミン・スン師の提案によるもので、リバイバルはまず聖書学校からと言う思いを込めて、定期的に学生・教師の祈りを結集しようと言う計画である。中央聖書学校の佐布校長も署名して協力を表明している。学生たちの活動範囲が、派遣先の地域にとどまらず、祈りのネットワークによって自国からアジア・太平洋全域へと視野を広げ、他の国々と重荷を分かち合うことになるのである。

この祈りが、やがて現地で肌をふれあつて国際的に宣教戦線を張る日に繋がるのもそう遠くはない。(北野 耕一)

編集後記
新年度を迎え、のびのびになっていたCBCニュースの発行をようやく果たすことができました。多くの方々のご意見と励まし、そして祈りが私たちを支え、また良き訓練となったこと覚え、心から感謝いたします。神様から日々頂く神学校での恵みを皆様と分かち合うことができるような新聞を、と願っています。

中央聖書学校同窓会より
この度同窓会の総会において役員改選が行われました。

中央聖書学校後援会から
入会のお祝い
中央聖書学校が教団の伝道者養成機関として発足以来、すでに四十五年を数えておりますが、その間多くの方々のご協力と捧げ物と奉仕によって幾多の伝道者、働き人がこの学舎から輩出されたことは感謝であります。

中央聖書学校後援会
会長 山田 亘
後援会入会要領
個人会員 一口 年額 五千円
法人会員 一口 年額 一万円
連絡は中央聖書学校内後援会宛にお願い致します。

静心

買うつもりはなかったが、着物の展示会をちよつとのぞいてみた。値段も立派だったが、どれもこれも美しい作品がたくさん並んでいた。その中で一つの着物が目に留まった。それはきれいな桜色の着物である。襟のあたりから裾までの微妙な色の変化、その優美な春を感じさせる風合いは、何とも説明しがたい。

IBUKI レポート

新入生を迎えて

この四月、駒込山は一四名の新メンバーを迎えて、伝道者になるための訓練と学びがスタートしました。毎朝行われるチャペル、志をともにする者との寮生活、様々な奉仕・・・新しく始まった神学校生活の恵みをはどのようなものでしょうか。

神様の御前に
芦田いずみ

神様は真実な方で、私を罪の中から贖い、召し出してください。今、その神様の真実にどう答えていけばよいかを考えさせられている。

とくに最近神様に対する姿勢というところに心が留まっている。ある人が電車で座っていた時に、その前に人が立ち、とても迷惑そうな姿勢をとったと言っていた。私はそれを聞き、神様の前にどんな態度でいるかということが大切だと思わされた。神様が見ていないと言って、いい加減な態度でいる

実は、献身者とは、聖霊とみことばの働きによって、世から分離され、主のものとされた者、世にあって世のものではない者のことである。言いかえると、主の恵みによってきよめられた結果、救われた者はすべて献身者となされたのである。その中から、神は直接伝道に専念する者を召しておられる。

聖霊によるきよさを生涯求め続けよう。神から与えられた賜物が神のために尊く用いられるように、内なるものを絶えず

てホセ書一・一〇「新共同訳二・一」を見ると、宣言された裁きの言葉が解かれて、救いの約束が与えられている。しかし、ここで「生ける神」がホセア書内の反バアル論証法であることは確かである。ウガリット神話で話題になっているバアルの死とよみがえりが裏で働いている。この神話でバアルはモット(死)によって殺される。その後、アナト、バアルの配偶者がモットを殺し、敵討った。この場面は次のように描かれる。

聖書と考古学

シリーズ 献身 Vol.4

白い衣

菊山 和夫

献身者に必要なものは何であらうか。あれもこれもと多くのものをあげることが出来る。しかし、今日もつとも必要なものは、「きよさ」ではなからうか。

どんなに才能が豊かであっても、きよくなければ用いられない。逆に、多くの弱さがあっても、きよめられた献身者を神は自由に用いられる。

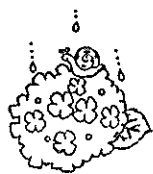
生ける神

ダビデ・ハイムス

「生ける神」は旧約聖書内で神様をあらわす重要な形容語句である。しかし、一般的に神の名として見逃されている。旧約聖書では「生ける神」と訳すべき文書は一五回ほどある。この形容語句に相当する句、「主は生きておられる」も二回ある。意味としては二つ、使い方として三つある。最初の使い方とし

「彼女は神聖であるモットを捕まえ、剣でさいて、ふるいにかけて、火で燃やして、製粉場石で引いて、畑に蒔いた」。この文書の後に、妻が芽を出すように、バアルがよみがえる。その時、神々が安心した。なぜなら、「最も力強いバアルが生きているから、地上の君が存在しているから」と書いている。この二つの文章のみでも、すぐ分かることは、バアルは豊饒の神であって、バアル教は豊作を迎えるため、宗教であっ

「あなたの衣を常に白くせよ。あなたの頭に油を絶やすな。」(箴言九：八) 真の献身なくして世界の救いはない。



た。イスラエル人たちはパレスチナ定着後、この宗教に誘惑され、ヤハヴェをバアル化した。これに立ち向かったのはヤハヴェの預言者、ホセアであった。「あなたはわたしを、わが夫」とよび、もはや「わがバアル」(わが主人)とは呼ばない。私は、どのバアルの名をも彼女の口から取り除く。もはやその名が唱えられることはない。」とホセアは述べた(二・一六、新共同訳一・一八、一九)。「生ける神」はホセア書では周期的バアルと違って、すべてをいつまでも、治めている神である。この神こそが「穀物、新しい酒、オリーブ油」を与える、契約の神である。(つづく)



「写真」 新入生歓迎昼食会
新入生賛美

4号室の恵み

前田謙仕

中央聖書学校に入学する直前だったと思う。ある方に「寮ってどんなところですか」と聞いたら、こんな答えが返ってきた。「毎日合宿をしているみたいなんですよ」。何となく寮囲気はわかるものの、一体どういうところだろうと不思議に思った。入学して最近、少しそのことがわかってきたような気がする。

私が入っている部屋は4号室。男子寮の中でも一番広い部屋である。そこに今、4人が生活している。きつと4人も男が生活しているのだから、殺伐とした寮囲気が漂っているか、というところではない。部屋の中には、庭から採ってきたミントの木やポトスやサボテンといった植物が溢れているのである。入学した直後は、毎日のようにお茶会が催され、学生たちが集まってきて、お菓子などの持ち寄りで楽しい語らいのときがあった。最初に「合宿」と聞いたときには、少しびっくりしたが、それが、みんな、で、わいわいがやがや楽しくやっていると意味であることを知った。

詩篇の中にこんなことばがある。「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんとしあわせ、なんと楽しいさであろう」。まさにこの詩篇のみことばを実践していると、こころが神学校の寮であると私は思う。